

■■ 第3部 ■■

投稿と査読の経験を語る

——ディシプリンの違いを踏まえて——

参加者：小坂康之* / 小林 知** / 山本博之***

／橋口善浩† / 川上桃子††

司会進行：藤田幸一†††

藤田 この座談会は、『アジア経済』と『東南アジア研究』という二つの査読付き学術ジャーナルの編集委員にお集まりいただき、個人的経験も含めて査読についてのより具体的な「生の」情報をご提供いただくという趣旨で企画しました。まずは登壇者の先生方に、それぞれの専門分野、方法論、フィールドにされている国や地域、そして現在関心をもって研究されているテーマなどについて、簡単に自己紹介をしていただきます。

川上 私は台湾研究と産業・企業研究の二本立てで研究をしています。テーマとしては、産業のグローバル化、東アジアのハイテク産業の競争関係、近年では中国と台湾の関係などを扱っています。

研究方法としては、インタビューなどの実態調査と資料分析を通じて、特定のリサーチ・クエスチョンを解き明かしていくスタイルをとっています。ディシプリンとしては、経営学、経営史、経済史、経済社会学といった分野に関心をもってしています。

* 『東南アジア研究』編集委員／京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科東南アジア地域研究専攻准教授。専門は民族植物学、自然資源管理、地域研究。

** 『東南アジア研究』編集委員／京都大学東南アジア地域研究研究所相関地域研究部門教授。専門は東南アジア地域研究、文化人類学。

*** 『東南アジア研究』編集委員／京都大学東南アジア地域研究研究所相関地域研究部門准教授。専門は東南アジア地域研究、メディア研究

† 『アジア経済』編集委員／日本貿易振興機構アジア経済研究所開発研究センター経済モデル研究グループ研究員。専門は応用計量経済学。

†† 『アジア経済』元編集委員／日本貿易振興機構アジア経済研究所地域研究センター・センター長。専門は台湾を中心とする東アジアの経済、産業、企業。

††† 『東南アジア研究』編集委員長

橋口 私の専門は経済学で、途上国経済の成長要因やそのメカニズムについて、ミクロとマクロの両面から研究をしています。具体的に言うと、「都市化」、「産業の構造変化」、「グローバル化」という三つのキーワードが途上国の経済発展にどのように関係してくるのかを明らかにしたいと思っています。現在は、中国とインドネシアの企業データを使って、都市化が企業の生産性や一国の景気変動に与える影響について実証的に研究を進めています。それと同時に並行で、産業構造がどのように多様化していくのか、そのメカニズムについても研究を進めています。

小坂 私の専門分野は熱帯生態学です。この熱帯生態学という分野は、純粋なサイエンスとしての生態学とは違い、熱帯地域における人と自然との関係を調べる分野です。研究手法としては、人と植物との関係を分析する民族植物学を参考にしています。近年では、東南アジアのラオスを中心とした地域で、自然環境の改変、農業の近代化、農村の過疎化といったテーマについて、人と植物との関係を指標に研究しています。

山本 私の専門はやや歴史寄りの地域研究で、マレーシアを中心に島嶼部東南アジアの社会と文化を研究しています。多文化社会における秩序形成と秩序再編に関心があって、ナショナリズム研究や災害対応研究、近年では映像メディアの研究に取り組んでいます。

小林 私の研究対象地域はカンボジアです。専門は東南アジアの地域研究ですが、とくに文化人類学的手法を軸にしています。20年ほど前に、とにかくカンボジアの農村に長く住んで、コミュニティ変化を丸ごと見てみたいと考えて研究を始めました。その後、コミュニティ・レベルの社会のダイナミズムだけではなく、もっとマクロな、たとえば「体制移行後にどのようなかたちで国家と社会が再編されていくのか」といったテーマについて、カンボジア、ミャンマー、東ティモールなどを含めて考えようとしています。仏教についての研究もしています。

藤田 以上、たまたまアジアを専門地域とする方だけになりましたが、にもかかわらず、アジアのなかでもさまざまな地域をフィールドに、しかも多様な専門分野や方法論で研究をされている先生方に集まっていただきました。査読のあり方や論文の書き方は専門分野によってかなり違いがあると思います。多様なご意見、ご経験を話していただきますので、座談会を傍聴される皆様には、ぜひ参考にしていただければと思います。

◆初投稿の経験談①

——挫折の苦い記憶、産みの苦しみ——

藤田 次に、みなさんに自身の査読付きジャーナルへの初投稿の経験談、すなわち最初の投稿論文についての話を語っていただくことにします。

橋口 私が初めて査読付きジャーナルに論文を投稿したのは大学院生のときでした。当時、私は論文の投稿先に迷っていたのですが、指導教官と大学院の先輩に相談したら、真っ先にすすめられたのがじつは『アジア経済』でした。指導教官や私の先輩の経験上、『『アジア経済』は査読者からの返事が比較的早いし、的確で教育的な配慮のあるコメントが期待できる』というのがその理由でした。そこで、「たとえ不採用でも次につながるだろう」という思いで『アジア経済』に初めて論文を投稿しました。

ところが、結果は残念ながら不採用でした。あの論文には自信があったので、それだけにすごくショックを受けました。しばらくは悔しくてまともに査読レポートも読もうとしませんでしたね。しかし、それでは先に進まないの、少し時間が経ってから冷静になって査読レポートを読み直しました。たしかに内容は厳しいのですが、説得力があって、しかも建設的な意見やアドバイスが多かったと記憶しています。

いま考えれば、私が書いたあの論文は、とても「一人よがり」なものだったと思います。論文を書くときに、査読者のこと、あるいは投稿しようとしている雑誌の読者のことをあまり意識できていませんでした。やはり仕上げてすぐに投稿するのではなく、もっといろいろな機会に研究報告をし

て客観的な意見やアドバイスをもらって、十分に論文を磨きあげてから投稿したほうがよかったんだろうなど、いまになって思います。

藤田 橋口さんは最初にたいへん苦い経験をされたようです。私もそうですが、「リジェクト」に相当するような厳しいコメントが返ってくると、それを読む気さえしませんね。(笑) とくに最初の論文は難関です。どう突破されたのか、他の先生方のご経験についても聞いてみましょう。

小坂 私は、大学院に入学してから5年間、1本も論文を投稿することができませんでした。フィールドに長期滞在して、それなりに自己満足して帰ってきて、いざ論文を書こうとすると、「あれも足りない、これも足りない」と足りないところばかりが気になって、なかなか論文を書く手が進まなかったのです。しかし、投稿論文がないと博士論文の提出が認められないので、焦る気持ちがつのるばかりでした。

当時、私は日本育英会（現在の日本学生支援機構）の奨学金をいただいていたのですが、この奨学金は大学院の5年間まででしたので、6年目に向けて富士ゼロックスの奨学金に応募しました。そして運よく1年間の奨学金に採択していただいたので、6年目には家に引きこもって、背水の陣で論文を書きました。

その論文は、ラオスの水田地帯における人と植物との関係がテーマでした。自然科学系の手法を使うので、指導教員の方針もあって英語のジャーナルに挑戦しました。英文雑誌への投稿は、人文・社会科学系よりも自然科学系のほうがはるかに採用されやすいと思います。

論文を書くときには、『これから論文を書く若者のために』[酒井2002]という本を脇に置いて、辞書のように何度も参照しました。この本は東北大学の進化生態学の先生が執筆されたもので、自然科学系の論文の書き方がわかりやすく説明されています。とくに、論文執筆にあたって大事なことが「アルプス一万尺」の替え歌で説明されているのが、個人的にすばらしいと思っています。私は論文を書くときには、いまでも「アルプス一万

尺」のメロディで、気をつけるべきことを口ずさんでいます。

藤田 大学院の最初の5年間で1本も投稿できなかったというお話は、小坂さんには申し訳ありませんが、本日ご参加の若い人たちを勇気づけるものではないかと思います。(笑) それにしても、最初の高いハードルを英語論文で越えたというのは驚きですね。自然科学という分野の特徴もあるのかもしれませんが。川上さん、山本さん、小林さんはいかがでしょう。

◆初投稿の経験談②

——失敗と気づき、姿勢と方策——

川上 私からは、自分自身の失敗に基づいて二つほどお話しします。一つ目として、論文を投稿するとレフェリーから厳しいコメントが山ほどついて戻ってくるわけですが、かつての私は、それを受けるとすぐに原稿の書き直しに取りかかっていました。ところがそれをしていて、レフェリーから指摘されたことに対応して書き始めたつもりが、他のところの加筆を一所懸命にやっていると話がずれていってしまい、だんだん收拾がつかなくなる、ということが起こるのです。

そんなときに、『リサーチ・マインド 経営学研究法』[藤本ほか 2005]という本に載っている経営学者の高橋伸夫先生の「英文論文のすすめ」というエッセイを読んで、方法を変えました。そこに書かれていたのは、論文の書き直しに着手する前に、レフェリー・コメントへの対応表、いわゆる指摘対応表をまず作る。それによって改稿の戦略をはっきりさせて、どこをどう直すのか先にリストアップする。それに即して具体的に論文を書き直していくという指南でした。

もう一つも、ある本(伊丹敬之『創造的論文の書き方』)からの受け売りなのですが、「プロは舞台裏を見せるな」という戒めです。これはつまり、調べたことや読んだ論文などの投影として論文を書くという教えです。とくに駆け出しのころは、勉強の成果や作業の筋道を少しでも盛りこんだりして、「私はここまで読み込んでいます」ということを書きたくなるものです。しかし、投稿する論

文には「舞台の表」だけ、つまり問いと結論、そしてそれを支える論理と必要なディテールだけを的確に書き込むことが重要です。このことを意識して書くと、採用される確率がより高まるのではないかと思います。

山本 私が初めて論文を投稿した査読付きジャーナルは『アジア経済』でした。当時は大学院生で、私が所属していた大学院には学生向けのジャーナルがなかったため、ジャーナル論文を書く方法を十分に身につけずのまま投稿したところがあったかなと思います。投稿した論文にはいろいろと厳しい査読意見が付いてきたのですが、そのことはもうほとんど覚えていません。今でも印象に残っているのは、参考文献の表記法についての指摘です。当時はメールではなく紙で原稿をやり取りしていて、編集委員の方がプリントアウトした私の原稿に赤字で修正箇所を書き込んだものを戻してもらいました。その指摘は原稿の余白に書ききれないほどの量で、原稿に糊で紙を貼って赤字を入れて、それでも足りずにさらに紙を貼ってというように、たくさん修正の指摘をしていただきました。

文献表記の仕方はジャーナルごとに違っているにもかかわらず、私はそのことをあまり重要に思わず、「ジャーナル側で直してくれるだろう」と思って自分に書き慣れた方法で書いていました。後に編集に携わるようになって、編集委員が他人の論文の文献表記を直すのはとてもたいへんな作業だということがよくわかりました。投稿者は投稿先の書誌情報の書き方をきちんと調べて、それに従って書いて投稿するべきだと強く感じました。

小林 私が最初に投稿した査読付きジャーナルは『東南アジア研究』です。フィールドワークの最中から、いちばんホットに、「これはおもしろいな」と思った仏教の実践の話についての論文を投稿しました。簡単に言うと、19世紀半ばごろから近代的な国民国家ができてくると、仏教にも中央集権的な制度にもとづく変化が生まれます。伝統的なものが刷新され、新しい仏教の実践がそのなかで始まりますが、それが農村に波及したときに何が起こったのかという話でした。いまお話ししたよ

うな変化は、タイでもミャンマーでもカンボジアでも見られます。そのような大きな枠組があった点が最初の論文として書きやすかったということかと思います。

そのあとも『東南アジア研究』には、カンボジアの農村の集落がどのように解体され再編されたのかという経験的なデータを使った論文を投稿して、掲載されました。1本目が人類学的な背景、2本目は歴史学的な背景を意識して書いたものです。

じつは、この2本の論文のあいだに一度『アジア経済』に論文を投稿して、それはリジェクトになりました。その論文は農地分配について書いたものです。カンボジアは社会主義時代があって、そのときに日本の農地改革のような動きが起こって、農地のやりとりがありました。私は世帯調査をしていてその一次データが手許にあったので、何とかそれを活かしたいと取り組んで投稿したのですが、不採用に終わりました。先ほどの第2部の『アジア経済』と『東南アジア研究』の編集方針の話をお聞きして、まさにその通りだと思ったのですが、データがあるからといって、それがきちんと問題に位置付けられていないと、論文としてはだめだと思います。農地分配については農業経済などさまざまな研究の切り口がありますが、そのときは私自身の立ち位置が曖昧だったのだと反省しています。

じつは私の研究が初めて活字になったのは、『東南アジア研究』に掲載された論文ではなく、アジア経済研究所が出している研究叢書を分担執筆した1章でした。『カンボジア新時代』というタイトルの本で、そこに経験的なデータ、生業の話を一挙に載せることができました〔天川 2004〕。この本に自分が調査した村の最初のデータを一度出せたことで、それを引用しながらジャーナル論文を書くというプロセスが踏めました。たとえばワーキングペーパーや紀要など、活字の媒体にはさまざまなものがあります。ジャーナルの査読論文にいきなり全力を注ぐのもいいですが、書き分けるという手もあると、いま思い返して個人的に感じます。

◆論文執筆の基本の重視と 査読レポートの活用

藤田 われわれは最初に投稿してからもう何十年も経つわけですが、そのあいだに何度も査読付きジャーナルに投稿してきました。その経験を含めて、今日ご参加のみなさんへのアドバイスをお話しいただきたいと思います。

小坂 私がいつも自分自身に言い聞かせているのは、とにかく基本が大事だということです。難しいことを考えるのもいいですが、それはあくまでも基本を忠実に守ったうえのことだと思います。私自身は以下の三つの点にとくに気をつけています。

第一に、自然科学系の論文は、論文のフォーマットが決まっています。イントロダクションから始めて、調査地と方法があって、結果があって、考察があり、最後は結論で終わる。これは人文・社会科学系の論文とも、ある程度は共通していると思います。このイントロダクションから結論までの各パートでそれぞれ書くべきことがあって、それを明確に書き分ける必要があります。とくにイントロダクションで何を書くか、あるいは結果と考察をどう書き分けるかといったことは、私が現在でも悩む難しい点です。

第二に、図表を可能な限りきれいに仕上げるように努力します。自然科学系の論文を読む人は、はじめにタイトルを見たあと、次に図表を見て内容を理解しようとします。文章を読むのはそのあとです。ですから、自分がかかるとも言いたいことを示す図表については、一目で言いたいことが伝わるように念入りに作成します。

第三に、目標とする雑誌の傾向を把握します。自身の研究に関連する論文を探しているいろいろ読んでいくと、自分の関心に近い論文を多く掲載している雑誌にきつと出合います。そのような雑誌に出合ったら、絶対にその雑誌に論文を掲載しようと、目標を定めます。そして近年のバックナンバーを読んで、その雑誌の傾向をつかみます。雑誌によって、掲載されている論文のテーマや研究手法、論文の様式に、何かしらの傾向があるはずで

また、投稿者向けの執筆要領には、掲載対象と

する内容、字数制限、あるいは論文のフォーマット、投稿の方法などの細かい指示が書かれているので、そうした情報も雑誌を選択する際の判断材料になります。

橋口 私の経験から言えることの一つ目は、論文審査の結果が「不採択」だったとしても、極端に落ち込む必要はないということです。「不採択」の通知を受け取ると、あたかも自分自身が全否定されたような感覚になってとても落ち込んでしまうのですが、そんなことはありません。人柄や人格が否定されたわけではなく、「単に投稿した論文がその雑誌の採用基準を満たしていなかったのだ」と冷静に捉えて、改善できるところはしっかり対応して、論文を磨きあげたらいいと思います。そのあと別の雑誌に投稿してもいいし、あるいは大幅に改稿して同じ雑誌に再投稿する手もあります。

もう一つお伝えしたいのは、査読レポートには査読者からの新しい提案やアイデアが含まれているということです。それは投稿した論文の改善に役立つのみならず、将来の研究の種にもなります。ですから、論文審査の結果がどうであったとしても、査読レポートをうまく活用して、研究のさらなる発展につなげていただきたいと思います。

◆誰に向けて書くのか吟味し、 投稿前に発表して精査する

藤田 われわれは投稿者としての経験に加えて、査読者として評価を行った経験も積んでまいりました。その両方の観点から、投稿を考えるみなさんに助言をお願いします。

橋口 査読者の研究分野と投稿者の研究分野は、重なる部分は必ずありますが、ぴったり一致することはほぼないと思ってください。ですから、バックグラウンドが異なる査読者や読者がその論文を読んで理解できるように、先行研究と自分の研究との関係を丁寧に議論して、自分の論文の新規性や重要性をしっかりと強調したらいいと思います。つまり、読者をきちんと意識して議論を展開することが大事です。具体的にどう書けばいいかについては、さまざまな参考文献が出ていますが、た

例えば有名なジャーナルに掲載されている論文の書きぶりをお手本にするのもいいと思います。

私が査読をしていてよく目にするのが、扱っている研究テーマ、トピックは重要だけれども、論文の完成度がとても低いというケースです。いい素材なのに、うまく活かしきれていない。これは本当にもったいないと思います。ですから、論文を一通り書き終えたら草稿の段階で、少し遠回りになるかもしれませんが、できるだけたくさん研究発表をしたほうがいいと思います。可能であれば、信頼できる人に論文を読んでもらって意見を聞くのもいいでしょう。その客観的な意見をもとに論文を何度も書き直して、必要に応じて新しい分析を加えて論文をバージョンアップさせてから投稿すれば、採択される確率は格段に上がると思います。

藤田 論文を投稿する前に、研究会等でなるべく多く発表してコメントをいただくことは、たしかに重要だと思いますね。

小林 橋口先生がおっしゃったように、どのような研究者コミュニティを思い浮かべて書くのか、誰に向かって書くのかは重要です。開発学なのか文化人類学なのか歴史学なのか、そこをきちんと考えることが一つです。それを考えたあと、橋口先生がおっしゃったように論文をたくさん読んで傾向をつかむといった作業に入るわけですが、まずは誰に向かって書くのかを考えなくては先に進めません。

もう一つ重要なことは、投稿前に多くの方に読んでもらうことです。編集委員をしていて、たまに「これは日本語として伝わるかな」と感じる場合があります。恥ずかしがらずに、投稿する前に第三者に読んでもらう。それを頼める相手をつくることも重要です。

最後に、これも橋口先生の話と重なりますが、コメントに対して表面的な捉え方は厳に慎んで、じっくり考えて、必要に応じてコメントの裏を読む姿勢も必要だと思います。たとえば、序論の箇所での修正を指摘されたらそこを直してそれで終わりではありません。そこで直したことは結論などさまざまなところに影響して、論文の筋を変える

はずですが、たまに小手先のリアクションが見られるときがあります。そういう論文は、どうしても査読プロセスが長引きますし、場合によっては不採択になってしまうこともあります。

◆査読者を味方と捉えて真摯に向き合い、
時には編集委員に相談

山本 海外で英語のジャーナルの査読をしたときの経験です。「理論的な枠組みが不十分なので、この分野の先行研究をサーベイして書き直して再提出してください」という査読結果を出したら、著者から編集委員を通して「具体的にどの研究を参照したらよいか教えてください」というリクエストが来たことがありました。対応はしましたが、私はこのリクエストにかなり戸惑いを覚えました。

戸惑った理由は、私が論文の投稿と掲載について、自分の研究の成果を自分で執筆したものをジャーナルに投稿して、それが研究者コミュニティの審査を受けて、それに通ったものが掲載されるというような、個人の研鑽の成果が認められたものに対して論文掲載が与えられるという感覚で捉えていたためです。しかし、何度か著者のリクエストに対応しているうちに、論文による成果公開は研究者コミュニティ全体で行っているもので、執筆と投稿の過程には編集委員も査読者もそれぞれの関わり方をしていて、その協力の成果として論文が世に出ているのだと考えるようになりました。

このことが日本語のジャーナルにどれだけ通用するかどうかはわかりませんが、論文はもちろん執筆者の責任で書かれるものなので、それを他人任せにしてよいということはありませんが、論文の執筆と投稿では一人で悩みすぎずに、もっと編集委員に相談してもよいのだと思いますし、査読内容について編集委員を通じて査読者に相談してみる手もあるのではないかと思います。

藤田 厳しいコメントが返ってくると、「査読者は敵だ(笑)」と感じてしまうことが多いわけですが、じつはよい論文に仕上げるための手助けをしてくれる人でもあるわけですね。その意味で査読者の機能、役割をうまく引き出すことも重要になって

くると思います。

川上 関連して言うと、とくに研究者としての駆け出しのころの私は、よくない査読者でした。というのは、査読をしているうちに、あたかも投稿者の共同研究者になったようなつもりになって、「このテーマについて分析するならこんな視点から行くべきでは」とか「あなたのフィールドでの発見からは、こうした結論が導き出せるのではないか」といった査読コメントをしてしまったことが何回もあるのです。

学会討論などでしたら、研究の中間成果に対するコメントですので、さまざまな方向性を示唆するコメントにも価値があるかもしれません。しかし、研究の最終成果物として出てきている論文に向き合うときには、査読者の側は投稿者の問題設定や研究手法を所与としたうえで、その手続きや論理展開の整合性や分析妥当性を確認する役割を負っていると考えべきです。そのことが、私自身も何度か査読を受けて、さまざまな査読者と出会うなかで見えてきました。

『アジア経済』も『東南アジア研究』も、いまではかつての私のような勘違いした審査者については編集委員会が適切な対応をしていると思います。とはいえ、時にはレフェリーが自分の視点や考えを過度に押し付けてきて、議論が噛み合わないケースもあると思います。投稿者としては、できるだけレフェリーのコメントに真摯に向き合ってそれを解決する努力をすることが大事ですが、それを尽くしても議論が噛み合わないときには、編集委員会に相談してみることをおすすめします。

編集委員会がすべての問題を解決できるわけではありませんし、どうしても齟齬が残ることはありますが、レフェリーとの相性が合わずに、何度書き直してもレフェリーとの平行線になり、せっかくの原稿がお蔵入りになってしまうのはもったいないことです。編集委員会はレフェリー・コメントの適切性を確認して担保する役割もあるわけですから、一人で抱え込まずに、周囲のアドバイスを受けながら、必要な場合には編集委員会に相談してください。

藤田 互いに生身の人間ですので、どうしても査読者とウマが合わないといった場合もあるかと思いますが。たとえば、査読者のなかには「私の研究論文を引用しないのはおかしい」と言ってくる人がたまにいます。また、悪気はなくても、異常に細かい、あまり本質とは関係ないことばかり指摘する人もいます。さまざまなケースがありえますから、度が過ぎていると判断した場合には、編集委員や委員会、あるいは身近な人に相談してみることも重要です。

日本文化人類学会の会員の方に教えていただいたのが驚いたのですが、『文化人類学』では投稿の際に、「査読してほしい人」と「査読してほしくない人」を申告する仕組みがあるそうです。おそらく、これまでさまざまな問題があつて、あくまで参考意見でしようけれども、編集委員会として、そういう情報も踏まえて審査することにしたのだろうと思います。

どうしても査読者の意見やコメントに納得できない場合には反論していいし、よく意見交換をしたらいいと思います。ただし丁寧に、きちんとロジックを立てて、感情的にならずに反論する。査読者と投稿者は、どちらが上ということは本来なくて、対等なものです。査読の“peer review”という言葉は「互いに評価する」という意味であり、まさに査読者と投稿者がともに、アカデミズムの発展に貢献すべく、対等な立場で対峙するということを示しています。

◆何から学び、どう考え、誰と協力して、
いかに書くか

藤田 もう時間もあまりなくなりましたが、初めて投稿しようという方も含めた若いみなさんに、最後に、アドバイスあるいは激励の言葉をお願いします。

橋口 いわゆるトップジャーナル、有名ジャーナルに掲載されている優れた論文をとにかくたくさん読んでください。そうした文献サーベイを通じて先行研究への理解をどんどん深めていく作業はとても重要です。しっかり行ってください。

同時に、優れた論文の論述の仕方もぜひ参考に

してほしいと思います。どのように議論を展開しているのか、内容だけではなく、そこも参考にしてください。わかりやすい、優れた論文は、文章表現がシンプルで明確で論理が一貫していて、その論文の重要性や先行研究との関係、分析手法の選択、そして最後の分析結果の解釈の部分まで、とても丁寧に書かれています。そうした優れた論文をたくさん読んでお手本にして、自分の論文を磨きあげてほしいと思います。

小林 その論文で何を伝えたいか、自分は何を言いたいのか、見えているかどうか重要です。たとえばタイトルがぼやけていたり、何を言いたいのかが見えていなかったりしたら、それはまだ論文を書くべき段階ではないのかもしれませんが。

何を伝えたいのか明確に見えたら次は何をするか。たとえば映画を1本撮る監督さんは、何百時間と撮ったものを切り詰めて90分とか120分の映画を作るわけです。ですから、文章表現のこだわりなどもあるかもしれませんが、まずは自分が伝えたいと決めたことを伝えるために何が必要かを客観的に考えて、必要な情報、必要なプロット、読者がきちんと自分の言いたいところまでついてきてくれるかを考える。これについては、時間はかかるかもしれませんが、挑戦すれば誰でもできるはずですよ。がんばってほしいと思います。

山本 研究の過程で調べたことや考えたことすべてを一つの最初の論文に盛り込もうとしないほうがいいと思います。論文は自分の研究の一部を切り出して、それを問題関心や先行研究などに合わせたかたちで示すものだからです。

私の個人的な考えがかなり入りますが、私は地域研究とは研究対象地域との関わりと切っても切り離せないものと捉えていて、研究成果をどのように地域や社会に伝えるかについては多様な形態があります。査読論文を書くことは、重要な方法の一つですが、唯一の方法ではないだろうと思います。研究成果を地域や社会に還元するには、論文を書くこと以外にもさまざまな方法があります。調べたり考えたりしたことそれぞれについて、これは論文で書いたほうがよいとか、これは

別の形で伝えたほうがよいとかいうように、誰にどのように伝えるのがよいのかを意識するとよいと思います。

さまざまな形で成果を伝えるための機会や立場を手に入れる必要があります、そのためには論文発表が必要ですが、論文は研究成果を発表するいろいろな手段の一つにすぎないと割り切って、調べて考えたことの一部を切り出してきて、適切な問題設定に見合うように整えて発表するものだと考えて、いろいろなジャーナルにどんどん投稿していくとよいのではないかと思います。

小坂 初めて論文を投稿するときがもっとも苦勞します。「それまで『教科書』として読んでいた雑誌に自分の文章なんて掲載されるわけがない」と考えてしまいがちです。しかし、1本でも自分の論文が雑誌に掲載されると、学術雑誌は絶対に従うべき「教科書」ではなく、大勢の執筆者と査読者、編集者の方がたが、試行錯誤しながら時間をかけて作り上げた作品であることがわかってきます。そうすると論文や学術雑誌に対する考え方が変わってきますし、読み方も変わってきます。文章を書くのは誰でも苦しく、それは雑誌に掲載された論文の執筆者もみんな同じ気持ちだということをお伝えしたいと思います。

川上 現在とても心配しているのがコロナ禍の影響です。地域研究者にとってフィールドに出られないのは大きな試練です。先も見えませんが、どんな激励の言葉も空虚に響いてしまうと感じますが、それでもやはり、いまこの不自由な環境のなかでできることをしていくしかないだろうと思います。

みなさんすでにしておられるかもしれませんが、オンライン読書会や勉強会、論文執筆互助会は、こんなときだからこそ支えになると思います。これまでも「読んでくれる人をつくる」という話が出ましたが、それを心がけることが必要です。私も、ここ数年、4～5人のゆるやかな原稿執筆互助会を作って、2カ月に1回ぐらいのミーティングで、互いの論文草稿にコメントをしあっています。ゆるやかな仲間が支えになると思いますので、ぜひチャレンジしてみてください。

◆質疑応答

藤田 ここからは、セミナー参加者からいただいた質問にお答えします。最初のご質問は、「『東南アジア研究』には、これまであまり教育分野の論文が掲載されていないようですが、何か注意点はありますか」というものです。東南アジア地域研究研究所にはかつて教育学の専門家もいらっしました。あまり論文がないのはとくに理由があるわけではなく、たまたま投稿が少ないのだと思いますが、小林さん、いかがでしょうか。

小林 古くは、たとえばインドネシアの国是であるバンチャシラと国の教育政策との関係を扱った論文などはあったと思います。注意点としては、近年SDGsなどに関連して開発学系の雑誌で教育分野の研究が見られますが、そうした内容を前提とするのではなく、当該の国や社会、コミュニティの文脈を十分に踏まえて書くことが一つのポイントかと思います。その部分がないと、「『東南アジア研究』よりは教育学のジャーナルのほうがいいのではないか」という判断を編集委員がして、別の雑誌をすすめる可能性があります。研究者コミュニティとして、どんな人に読んでもらいたいか、どんな先行研究をベースにする研究者コミュニティの仲間として発言したいのかが重要かだと思います。

藤田 次のご質問に移ります。「紀要と査読論文等の書き分けについて、もう少し例を挙げてご教示いただけますでしょうか」というものです。

小林 たとえば地理学で言えば、地理学理論に関する論文もあれば地誌的な論文もあります。地域研究のなかでも、文化人類学の一般的な理論や理解の枠組みを精緻化する方向のものもありますし、その地域の情報を積み上げる論文もあります。その両方の研究の営みは切っても切れない関係にあります。

先行研究と自分の研究との関わりをきちんと位置付けられて、結論まで持って行けるものは査読論文として、たとえば『東南アジア研究』にも投

稿が成り立つと思います。一方で、先行研究の枠組みに位置付けることができる以前の現地情報を活字として発表する価値も十分にありますし、先ほど私が述べたように、それをしたからこそ次のステップでより理論的な議論ができることもあります。私の経験ではそうですが、藤田先生はどうお考えでしょうか。

藤田 私も、自分の論文を自分で引用すると書きやすいと感じる場合がありますね。実際にその意味でうまく使い分けている研究者もたくさんおられます。

次に、「英語論文の投稿と日本語論文の投稿、それぞれのメリットは何ですか。日本語論文を英訳して他の雑誌に投稿することはありなのでしょうか」というご質問ですが、これはわたしからお答えしたいと思います。

日本語論文を英語に翻訳して出すことについては、厳密に言うと二重投稿になりますので、原則としてはあまりよろしくないとは思っています。しかし、つい最近まで、こうしたことに対してはゆるい規制しかなかったという現実もあります。実際に、日本語論文を書いても英語話者はほとんど読めませんから、英訳して自分の研究成果を広めたいと考える人は多いと思います。ただし、そういうことが認められるかどうかは各雑誌の編集委員会の考え方によって大きく違います。ですから、それをしたい場合、あらかじめ編集委員会に問い合わせをしてください。いいか悪いか明確に答えられなかったとしても、ニュアンスぐらいはわかるとは思いますので、まずは問い合わせさせていただきたいと思います。

以上の点をお断りしたうえで、英語で投稿する場合と日本語で投稿する場合のメリットとデメリットについてお話しします。英語論文は世界に発信するものですから、それだけ対象とする読者が広がります。その一方で、書き方は日本語論文とずいぶん異なります。最初に結論をはっきり書く方がよいなどの違いがあって、それなりに苦労して書き分ける必要があります。

日本語で論文を書くメリットについては、日本は人口が1億2,600万ほどありますので、それなり

の一つの学術コミュニティがあります。そのなかできちんとした評価を得たい、あるいは共通認識を作りたいということなら、日本語論文のほうが書きやすいと思います。私もだいたい慣れましたが、日本語論文の内容を英語で書くとなると、まだ言いたいことの半分ぐらいしか書けないという現実があります。その意味で、日本語論文もうまく活用することが重要ではないかと個人的には思っております。

藤田 次に、「先行研究が少ない分野での先行研究サーベイはどのように行ったらいいのかわせてください」という質問が来ています。山本さん、お答え、お願いいたします。

山本 重要な問題で、ご質問の趣旨はよくわかります。私もそうしたことに悩んだ経験があります。ただし、「先行研究がほとんどない」あるいは「この分野については研究がないから私がこの研究をする」というのは、ジャーナル論文としてはよい評価を得られないことが多いと思います。査読する立場からは、「先行研究がほとんどない」と言われると、まず「その研究課題は学術的意義が低いから誰も研究してこなかったのではないか」という気持ちが生ずるのでハードルが高くなります。あるいは、「特定の地域や特定のテーマに狭く絞りが過ぎていて、先行研究が見つからないと思込んでいるだけではないか」と思うかもしれません。論文執筆では対象地域やテーマを絞るほうがよいのですが、先行研究に位置付けるときは地域やテーマを狭く絞り過ぎないほうがよいです。

地域を狭く絞り過ぎないというのは、他の地域で同じような課題について研究がされていないかを探すことで、これについてはあまり説明の必要はないと思います。テーマを狭く絞り過ぎないことについて、一つの方法を紹介します。私が心掛けているのは、研究テーマを固有名詞抜きで表現するとどうなるか考えることです。たとえば「インドネシアのスマトラ島沖地震・津波の復興過程について」というテーマだと、まず「インドネシア」という固有名詞を別の言い方でどう表現すればいいのかを考えます。「スマトラ島沖地震・津波」に

も固有名詞が入っています。固有名詞を使わずにどう表現するかを考えると、その表現の仕方に自分の関心が反映されるので、そこから先行研究に結びつくことがあります。

研究テーマを固有名詞抜きに表現できたけれど、それに合った先行研究が見つからない場合は、もしかしたらその研究テーマには一つの論文で扱いきれない複数の研究テーマが含まれていて、それを一足飛びに論文にしようとしているのかもしれない。その研究テーマで前提とされていることがじつはまだ十分に議論されていない重要な研究テーマかもしれないので、その一つひとつについて、自分が持っているデータを使って、なぜその前提が重要で、なぜそれが成り立つのかを論証しようとする、それが一つの論文になるかもしれません。一つだと思っていた研究テーマで論文がいくつも書ける可能性があり、その積み上げの先に、最初に構想していた研究テーマの論文が書けるかもしれません。固有名詞を使わずに研究テーマを語るとどうなるかを意識してみてもいいと思います。

藤田 次のご質問は、「『アジア経済』には、複雑な計量分析か、長期にわたる綿密な現地調査かの二つのタイプの論文が多くありますが、他のタイプの論文はどのようなものが考えられますか」というものです。それと関連して、「投稿する先がディシプリンのジャーナルか地域研究のジャーナルかで、投稿にあたって気をつけるべき点など違いはありますか」という質問もあります。関連した質問ですので、二つ一緒にお答えをお願いします。

川上 『アジア経済』には、計量分析型とフィールドワーク型の論文以外にも、いくつかの研究の類型があります。例えば、書評論文というかたちで一冊ないし複数の書籍をてがかりに特定テーマを論じる論考です。また、私自身も何度か執筆したことがあります。観察したケースの数は限られるけれども、そこからなんらかの仮説や中間的知見を提起するとか、新たな切り口から問題を設定するといった「研究ノート」というジャンルもあります。そのほか歴史系の研究もあります。パッ

クナンバーをご覧いただくと、多様なタイプの論文があるのがおわかりいただけると思います。

次に地域研究のジャーナルとディシプリン・ジャーナルについてですが、たとえば『アジア経済』の場合ですと、第2部での説明にもありましたように、二人のレフェリーを選ぶにあたって、地域の専門家とディシプリンの専門家とに分けて依頼することが多いです。それゆえ、実際には、地域研究のジャーナルである『アジア研究』においても、ディシプリンの視点からの検討がなされています。その意味で、この違いは大きなものではありません。

ただし、地域の専門家がレフェリーに入る地域研究ジャーナルの一つの特徴として、その地域の実態に即して問題が理解されているかということは、必然的に重視されます。扱う現象の背後にある歴史や制度もきちんと勉強したうえで、的確に問題を位置付けているかどうかということは、地域研究系のジャーナルでは必ず問われます。

また、これは研究対象国によりますが、現地の学術コミュニティが発展している国では、現地の研究者によるその現象やトピックに関する研究の蓄積があります。そうした日本以外の研究者による研究をフォローしたうえで立論をし、議論を展開しているかということも評価の一つの物差しになるかと思います。

いずれにせよ、地域研究系のジャーナルとディシプリン系のジャーナルとの違いは、以前に比べると小さくなってきている傾向があると私自身は感じています。

藤田 最後に、「本日取り上げられた二つの学術誌には、いつかぜひ投稿してみたいと思いつつも、気軽に投稿まで気持ちが進まないのも事実です。すでにずば抜けてすばらしい業績をもつ研究者や学者の方がたが投稿されるなか、私のような若手の研究者が経験として投稿していいかと躊躇することも多々あります。私は留学生なので、なおさらそうなりがちですが、何かご助言などいただけませんか」という質問です。小坂さんが所属する大学院には留学生がたくさんおられますね。その経験も含めてお答え願えますか。

小坂 初めてだからだめで、何度も投稿した経験があるから載りやすいということは決してありません。査読の際には著者名を消してありますから、査読者は誰が書いているかわかりません。ですから、「この研究者だから、経験があるから採択しよう」ということはいっさいないわけです。

先ほど藤田さんがおっしゃったように“peer review”ですから、査読者も投稿者もみんな平等にジャーナル共同体に関わる人です。また、査読者が厳しいコメントを返してきたとしても、それが100パーセント正しいとは限りません。初めての論文について一人で査読者とやりとりするのは難しいでしょうから、査読コメントをもらったら指導教員の先生とも相談して、必要があれば編集委員や査読者にこちらから聞いてみるということも、手段としてはあります。

しかし、何はともあれ、まずは投稿しないとコメントももらえません。私自身、査読者のコメントは厳しかったけれどもそれがすごく勉強になった経験があります。ですから、査読者のコメントをもらうためにもまずは投稿してみることをおすすめします。それによって自分の研究がさらに広がっていくことも多々あると思いますから、最初から遠慮なさらずに、ぜひ投稿してみてください。

藤田 最初の論文はハードルのようなものです。一度越えさえすれば、どうってことはない世界が広がっています。誰でも一度は越えないといけないもので、自分だけが特別というわけではありませんので、ぜひ『アジア経済』や『東南アジア研究』に投稿してみてください。どうぞよろしく願いいたします。

引用・参考文献

- 天川直子(編). 2004. 『カンボジア新時代』千葉：アジア経済研究所.
- 藤本隆宏；高橋伸夫ほか. 2005. 『リサーチ・マインド 経営学研究法』東京：有斐閣.
- 伊丹敬之. 2001. 『創造的論文の書き方』東京：有斐閣.
- 酒井聡樹. 2002. 『これから論文を書く若者のために——イントロ大切 何をやるのか どうしてや

るのか 明確に ホ～♪』東京：共立出版.